

大阪女子高等医学専門学校におけるアジア留学生

李思齊

一 はじめに

一九二八年六月三十日専門学校令により、関西医科大学の前身である大阪女子高等医学専門学校（以下大阪女医専）が創立した^①。爾来同校は東京女子医学専門学校（以下東京女医専）、帝国女子医学専門学校とともに、旧制女子医学専門学校として知られている。とくにこの大阪女医専は大阪府牧野に位置し、当時西日本での唯一の女子医育機関であった。東京女医専より入学しやすかったのか、数少ない選択肢の一つとして注目されていた。戦前入学していた学生が作った同窓会は延べ十八回にもなり、実に多数の女性医師を育ててきた。しかしながら、留

学生の数からいうと、ほかの二校に比べ、かならずしも多いとは言えない^②。

近年、近代中国人留学生研究、とくに日中戦争勃発以前の研究は数多くの成果が出されている。資料の不足もあり、今までは太平洋戦争期における偽政権留学生について研究はまだ十分ではない。たとえば満洲国留学生派遣事業、その制度の成り立ちと発展についての研究は、全体像をかなりよく把握してきた。しかし、留学生団体の全てに普遍性があると一概には言い切れない。そのため、近年は全体的な研究から個別の事例へ、とくに一つの学校に通った中国人留学生を通して、留学史の実像を把握しようとする傾向がある^③。

筆者は去年大阪女医専の元学生である王静女史に出会い、また彼女の紹介で、同級生の傳秀華に電話インタビューを実行した。加えて大阪女医専の後身である関西医科大学同窓会から貴重な資料の数々を提供していただいた。これまでに現存する多くの名簿⁽⁴⁾と同窓会が提供した会員名簿とを照らし合わせることで、当時この学校に通っていたアジア留学生の実態を把握することが出来た。

「満洲国」(以下満洲国と表記する)留学生予備校の卒業生は九十年代、五十年ぶりに同窓会を復活させた。その立案者は王静女史であり、会長役を務めたのは單純(本名…単春生)である⁽⁵⁾。両者ともこの学校の学生であった。そのため、この大阪



写真その1 1943年4月、入学時牧野キャンパス校門前の王静女史

女医専を取り上げるのに十分価値があると考えられる。

本稿では、これまで不明であった当時大阪女医専のアジア留学生

のデータを明らかにし、そこから見出せる当該学校に通っていたアジア留学生の特徴を論じる。個々の事例を通し、戦時中の留学は如何なる性格を有していたかを概観したい。また、王静女史と傳秀華女史のような個別な事例を紹介し、戦時中、とくに敗戦直前の留学生生活の一端を示す次第である。

二 関西医科大学の同窓会とアジア留学生

大阪女医専の同窓会は一九三三年に一回生の卒業と同時に発足した。一九三〇年に創刊された校友会機関誌「加多乃」と、一九三七年九月より発行された同窓会誌「おとづれ」の二種類の発行物があった。戦時中は用紙入手難のため、一九四三年より約五年間の休刊期間があった⁽⁶⁾。これらの機関誌は卒業した会員にのみ配られたもので、ほとんど外部の人は見られない状況にある。



写真その2 1943年4月、入学時の傳秀華女史



写真その3 1943年か、大阪女医専寄宿舍6人部屋（向かって一番右は王静女史）

戦前では、ここ大阪女医専から十四回生までの卒業生が送り出された。一九四五年まで無事にここから卒業できた留学生は十四回生までとなるが、入学時期を考えると、一九四五年入学の十八回生まで考慮しなければならない。関西医科大学同窓会

では、卒業した学生の会員名簿管理や同窓会誌の発行に勤めてきた。今回利用した大阪女医専側の資料は同窓会が管理している資料に加えて、筆者が古本屋で入手した『会員名簿』が挙げられる。当然、卒業しなかった学生については、全くわからないため、終戦間際の留学生の実態についての情報は少ない。

今回取り上げるアジア留学生の情報をすべて網羅したとはいえないが、ほぼ揃えられたのではないかと思われる。それによると戦前大阪女医専に在学した留学生の総数は四十名である。その内訳は、地域別に言うと、中華民国四名、台湾四名、朝鮮半島十一名、満洲国二十一名である。

三 留学生ならぬ留学生

この学校は三人の中華民国留学生が在籍していたことがわかる。『日本留学中華民国人名調』（以下『人名調』）によると、蔡聯欽、楊節子、江国瑞の三人である⁷⁾。そのほか、『会員名簿』⁸⁾には国籍のない中国人の名前が見られる。以下、それぞれの事例を紹介し、この人たちが持つ共通点を探る。

一九二八年六月三十日に創設された大阪女医専は早くも七月に第一回生を迎えた。創設時代でもあり、初期学生の数は予科生の百六十名であった⁹⁾。この中で、中華民国出身の学生が一

人いた。名前は蔡聯敏である。以下、関西医科大同窓会が保管した資料及び蔡聯敏自身が書いた叙述録に基づき、彼女の生涯を紹介する。

蔡聯敏、字は初秋といひ、一九〇七年十一月十五日神戸で貿易商人の娘として誕生した。本籍は広東省中山県である。一九一九年十二月神戸華僑同文小学校を卒業、翌年から一九二三年まで神戸文徳学塾において漢文を学ぶ。両親は娘が長らく異郷にいたため、国学を忘れることを案じていた。よって、神戸華僑同文学学校の校長で同じく広東出身の伍緯餘に師事して中国伝統文学について学んだ。その後、一九二七年まで、神戸セントマリー女学校で学業を修め、翌年七月十日大阪女医専に入学した。満洲事変後、母親と弟は香港に移住したが彼女は父親と二人で日本に残り、一九三三年六月より、京都帝国大学医学部で微生物学について研究を進める。さらに、一九三七年七月研究論文を完成させるや、盧溝橋事変があったため、帰国せざるを得なくなったという。日中戦争期広西省と香港の間で転々とし、終戦後、中山大学の教員になり、新中国政権成立後、香港に移住した。一九八四年からは一時期カナダで暮らしていたが、その後香港に戻り、二〇一二年五月、一〇五歳で世を去った¹⁰⁾。

右で紹介したように、蔡聯敏女史は医学研究にも文学にも造詣が深い持ち主であった。彼女は文部省から奨学金を貰い、こ

れからの業績が非常に期待できる、と一九三三年二月二日『朝日新聞』で紹介された¹¹⁾。また、この学校の教員だった伊達俊光は自身の随想録の中で、「第一回の生徒中の蔡聯敏という中華民国の若い女性がなかなか傑れた頭脳の持主で成績も抜群であり、教養も備つて人気を集めてゐた。彼女は昭和八年卒業後定めて彼の地で日本の医術を以て救世の業に従ふてゐるであらうが、日支事変の今日此頃健在であるかどうか、時々私の思ひ出の種となつてゐる。」と彼女のことを絶賛している¹²⁾。

つぎに、楊節子という人物についての資料を挙げてみる。当該人物は『人名調』で広東省順徳の出身とある。一九一四年生まれで、神戸成徳校女出身ということが備考欄で示されている。実際彼女は一九三二年入学、一九三七年卒業の第五回生に当たる。順徳と中山は隣町でもあり、蔡聯敏、楊節子は共に華僑の子孫だということが容易にわかる。また、節子という名前は中国人には珍しいつけ方で、おそらく母親のほうは日本人ではないかと推測できる。また一九四六年『同窓会会員名簿』には吉岡節子(旧姓楊)と書いてあり、卒業後日本人と結婚したのではないかと考えられる。同窓会保管の資料には、終生関西で医者として生涯を全うし、一九六二年に世を去ったと記されている。最後に、江国瑞について言及する。同窓会の資料には彼女の名前が見られないが、『人名調』では湖北省鄂城の出身と書い

である。湖南省長沙女子第二中学を卒業後、同学校に入り、一九四二年七月帰国して、そのまま学業を放棄したと推測できる。別の資料を見ると、彼女は一九三五年九月より選抜補給生になっていたことがわかる。月額五十円の補給を受ける際に、大阪女医専から外務省に彼女の履歴と成績証明書が送られたことがあった。その履歴と関連資料から彼女の状況を紹介する。

江国瑞は一九一六年七月十八日中華民国の外交官江華本の娘として生まれた。本籍は湖北省鄂城県である。一九三二年六月湖南省長沙女子第二中学校を卒業、一九三四年四月より大阪女医専に入学した。在学時の成績は平均九十二点できわめて優秀であり、「素行非難する点なし」と評価されたが、思想面において、「思想要注意人物」と外務省文化事業部に報告されたことがある。彼女の保証人は当時神戸総領事館副領事である潘錦堯で、保護人は父親の外交部条約委員会委員江華本である。父親が満洲事変のとき日本政府を批判した言論があったせいから、外務省に目をつけられたと考えられる。しかし、五年目にあたる一九四二年七月に国に帰ってからは、二度と日本には来なかった¹³⁾。

七回生として卒業するはずだった江国瑞のその後の人生について、『関西医科大学同窓会五十年史』には次のように記されている。

神戸総領事の娘さんで美人で聡明な江国瑞さんを覚えていいますか。日支事変が起こって四年生の夏休み、本国に帰られたまま消息不明でしたが、最近全く偶然の事から（中略）次のような事が判りました。彼女はアメリカに渡り、小児科医のご主人（最近死去された由）と一男の健康で幸福な家庭を築き、現在カリフォルニア大学のサンタ・バーバラ研究所でDr.Marilyn Kiang-urich の名前でスタッフの一員として研究に励んでおられるとのこと¹⁴⁾です。

さらにインターネットで調べると、一九九九年十月十五日にサンタ・バーバラで世を去ったことがわかった。アメリカで数多くの研究論文を発表しており、その活躍ぶりが伺える¹⁵⁾。

以上の三人以外に、一九三八年卒業の第六回生の中に、鄭呉氏翠雲と記された人物がいる。彼女はその後森方宝子と日本人らしい名前で『会員名簿』に登録されている。留学生をまとめた名簿の中に名前がなかったことから、この人物も当初日本に住んでいたことが推測できる。名前を変えたのも日本人と結婚したからなのではないかと考えられる。

したがって、彼女たちの身分の共通点を挙げてみると、次のようになる。両親の都合で日本に生まれた、あるいは渡ってき

た。一般的に認識された留学生の定義と若干違いがある。留学生という名にふさわしくない留学生ならぬ存在である。こうして、大阪女医専通っていた最初の留学生はこのように、留学を目的としない、両親に付随して日本で勉強に励むしかない特殊な学生だったことがわかる。

四 外地より来た留学生たち

台湾と朝鮮半島は戦前日本の植民地である。日本本土を内地といい、台湾と朝鮮半島を外地という。このようないわゆる外地の学生は当時留学生の枠組みに入っていないようである。大阪女医専では台湾と朝鮮半島から来た学生も非常に多かったと言える。しかし、中華民国と満洲国のように、一度入学した痕跡が残れば、探し出せるが、台湾と朝鮮半島の場合、十六回生に一人卒業できていなかった台湾学生を除いて、基本的に卒業生しか確認できない。以下、一九四六年『同窓会会員名簿』及び二〇一四年『会員名簿』に準じて、表一にして紹介する。

下のように、台湾と朝鮮半島出身の留学生の一斑が見てとれる。この中で、とくに朝鮮半島出身の学生に目を引かれる。彼女たちは創始改名により、日本式人名を有するようになった。また、大半は戦後日本に残り、医院を経営する身となった点は

非常に興味深い。近代日本における朝鮮人留日学生を見極めるために、この点は非常に留意すべき点だと思われる。
台湾出身の留学生についての情報は、管見の限り、張廬玉鳳のみである。戦後、台湾に引き揚げた後、大学に入り男女共学で勉強したと本人が述べている¹⁶⁾。

表一 大阪女医専卒台湾・朝鮮半島出身の留学生

人 名	出身	在 籍	人 名	出身	在 籍
董晋采	台湾	十四回生	張廬玉鳳 (竹原久仁子)	台湾	十六回生 (仮)
高 梅	台湾	一回生	林金英	台湾	七回生
李景林 (三原景林)	朝鮮	一回生	朴福星	朝鮮	三回生
李康順 (高城康子)	朝鮮	六回生	徐錫順 (徐順子)	朝鮮	八回生
張粉石	朝鮮	八回生	朴永礼	朝鮮	八回生
羅桂芳 (平林桂子)	朝鮮	九回生	蔣順女 (青松裕恵)	朝鮮	十回生
金宝廉 (佳山肥代)	朝鮮	十一回生	杜雲峰 (西喜久子)	朝鮮	十一回生
姜愛珠 (神本愛子)	朝鮮	十三回生			

五 満洲国留学生と大阪女医専

満洲事変後、中国東北地域の留学生事業は一旦停止状態に追い込まれた。満洲国建国につれて事態が沈静化し、留学事業は再開したが留学生に関する一連の法令が発令されるまで、留学生管理についてはまったくの無政府状態に陥っていた¹⁷⁾。

この時期の留学生は非常に把握しにくい。満洲国大使館は一九三五年から一九四三年にかけて計九冊の『満洲国留日学生名録』（以下『学生録』）を編集したが、一九三二年から一九三四年までの留学生名簿は日華学会だけが頼りとなる。当然統計に入っていない学生の存在もあったらしい。筆者の調査するところでは、ほかの学校においても、記述の漏れた人物が存在することがある¹⁸⁾。

したがって、この名簿でも多くの問題点が見られ、結局各学校のデータを参照しなければならない。今回関西医科大学同窓会編二〇一四年『会員名簿』より、大阪女医専に通っていた満洲国最初の留学生が判明した。同窓会第二回、つまり一九三四年の卒業生柴田すぎである。彼女の本名は左素葵といい、出身は満洲と表記してある。それ以上の情報はわからないが、同窓会名簿には現住所アメリカと書いてある。二〇一四年時点では存命かと思われる。

以下に、『学生録』、『留学生予備校一覧』、『留学生予備校同学録』¹⁹⁾（以下『同学録』）『教育部特設東北臨時大学補習班同学録』（以下『臨時大同学録』）²⁰⁾及び前文に言及した関西医科大学同窓会資料をまとめた上での表二になる。

次頁の表が示すように、留学生予備校六期生までの在学情報は『学生録』から確認が取れる。七期生の情報は『同学録』及び七期生東京女医専に入学した史延芳女史の情報に即して作ったものである²¹⁾。また『東北臨時大同学録』のみ掲載された名前がある。この学生の中で、関西医科大学の卒業生データに名前が載っている学生は左素葵、孫麗君、邵淑栄三人だけである。

孫麗君の場合、『満洲国学生日本留学拾周年史』に特筆されている。彼女の夫は殉職していたらしい。いわゆる未亡人の身分で子供をつれて、日本にやってきた。当時、大阪女医専の日本人学生の中にこのような未亡人学生が少なくなかったと王静女史は証言している。しかし、未亡人留学生という身分はおそらく彼女一人だけであろう。卒業後の彼女は満洲国新京市立病院に勤務したことが判明できるが、戦後の情報は全く知るすべがなかった²²⁾。

程吉子の場合、その国籍に疑いがある。また、一九四〇年のときに学していたが、一九四一年の名簿にその名前が見当たらなくなった。何らかの原因で帰国したかと推測できる²³⁾。

表二 満洲国（関東州含む）出身留学生

人 名	出 身 校	留学生予備校	在 籍
左素葵（柴田すぎ）	不詳	否	二回生
孫麗君	北京清華女子中学校	否	九回生
程吉子	新京錦ヶ丘高等女学校	否	十三回生（仮）
何春馥	奉天第二女子国民高	予備校四期生	十四回生（仮）
邵淑棠	ハルビン第一女子国民高	予備校四期生	十四回生
王玉卿	ハルビン第一女子国民高	予備校五期生	十五回生（仮）
单春生（單純）	新京第一女子国民高	予備校五期生	十五回生（仮）
徐文書（徐力）	吉林女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
王静	新京第一女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
吳益珍	大連羽衣商女	否	十六回生（仮）
趙瑞芝	四平市開原女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
張淑勤	吉林省吉林女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
傅秀華	吉林省吉林女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
楊淑文（吳新）	金州省女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
梁秀章	新京第二女子国民高	予備校六期生	十六回生（仮）
杜名蘭	不詳	予備校七期生	十七回生（仮）
曲玉潔	不詳	予備校七期生	十七回生（仮）
許広沢	不詳	予備校七期生	十七回生（仮）
????	不詳	予備校七期生	十七回生（仮）
馮建	不詳	否	十八回生（推定）
李潔敏	不詳	否	十八回生（推定）

邵淑棠の場合、二〇〇五年七月四日付けの『北京青年報』『方軍与謝罪鬼子兵』の記事に、戦前看護師だった勝間靖子の証言がある。記事では「勝間は留日医師邵淑棠を第一の貴人だと見なした。当時、いたるところに「日本人を雇用するな!」とポスターが張ってあった。しかし、邵淑棠は危険を顧みず、勝間にある教師の使用人としての仕事を紹介した。そして、勝間を中国人名「劉静貞」と名づけた。ある日、ソ連軍の手から勝間を救った。その後、邵淑棠の紹介で東北電影製片場の撮影担当の王徳成と結婚した。（中略）邵淑棠は勝間を救ったことから造反派に漢奸罪で弾圧され、棒で殴られ、無念の死を遂げた。」と書いてある²⁹⁾。

何春馥の場合、一九四二年版『学生録』に載っている年齢から、彼女の生まれ年是一九二三年と推測できる。『会員名簿』に名前がなかったことから、邵淑棠と違って、学業が終わらないまま、帰ったらしい。『同学録』によれば、戦後長春市婦産医院に勤め、一九九七年一月四日に世を去った³⁰⁾。

王玉卿の場合、一九四二年版『学生録』に載っている年齢から、彼女の生まれ年是一九二三年と推測できる。『同学録』によれば、最終学歴は満洲医科大学の後身の

中国医科大学である。戦後鞍鋼鉄東医院に勤めていた⁽²⁶⁾。

単春生の場合、劉（二〇一五）の著書にインタビュー内容が収録されている。彼女は戦後名前を単純に変えた。『同学録』によれば、最終学歴はハルビン医科大学である。戦後瀋陽鉄道医院に勤めていた⁽²⁷⁾。

徐文書の場合、帰国後、王静女史と同じく長春医科大学に編入された。美濃口知代の証言によれば、彼女は大学卒業後、吉林鉄道センター病院小児科で長らく勤め、その後北京燕山石油化工総合会社職員病院に勤務し、さらに中日友好病院小児科主任医師となった。一九八六年十月傅秀華女史に同行し、母校を訪問した。国交回復後の日中間学術交流の促進に努めた⁽²⁸⁾。

呉益珍の場合、『同学録』によれば、一九二四年九月六日生まれ。最終学歴は中国医科大学である。戦後上海第二軍医科大学婦産科に勤めていた。王静女史の証言によると、彼女は日本人経営の学校で学んでいたことがあったから、日本語は非常にうまくいったという⁽²⁹⁾。

趙瑞芝の場合、『同学録』によれば、最終学歴は中国医科大学である。戦後瀋陽市第四人民医院小児科に勤めていた。

張淑勤について詳しくわからないが、王静女史の証言によると、二〇一六年時点で世を去っている⁽³⁰⁾。

楊淑文の場合、先述の劉（二〇一五）にインタビュー内容が

収録されていた。戦後事情によって、名前を呉新に改めた。大阪女医専在学中、奨学金をもらっていたらしい。本来なら彼女は私費留学生であったが、何かの理由で奨学金をもらっていたそうである。『同学録』によれば、一九二三年十二月二日生まれ。最終学歴は長春医科大学である。戦後東北師範大学職工医院に勤めていた⁽³¹⁾。

梁秀章は王静女史の義理の姉に当たる。文化大革命の最中、世を去った⁽³²⁾。

杜名蘭の場合、『同学録』によれば、一九二七年十一月十日生まれ。最終学歴は長春医科大学である。戦後長春市医学情報研究所に勤めていた。

曲玉潔の場合、『同学録』によれば、一九二四年十二月二十九日生まれ。最終学歴は中国医科大学である。戦後は錦州鉄路センター病院に勤めていた。

許広沢の場合、『同学録』によれば、一九二五年二月二十一日生まれ。最終学歴は中国医科大学である。戦後は錦州医学院付属医院に勤めていた。

以上、個々の事例から読み取れる共通点をまとめてみる。まず、生まれ年が違うが、留学しに行った年齢はみな十八歳前後の若い年齢だと判明した。また、卒業が果たせなかった学生は一九四五年に引き揚げた際、満洲国政府の斡旋により、継続学

習したことがわかる。その後、文革の嵐で帰らぬ人となった二人を除き、ほかの人はそれぞれの分野で医者として新中国時代も活躍していたことがわかる。

大阪女医専の十七回生から学業を半ばに帰ってしまった留学生を偲ぶ記述がある。この記述から、一九四五年、満洲国留学生の帰国は順風満帆ではなかったことがわかる。有志の日本人学生が世話していたことから、日本人学生との関係はよかったことが読み取れる。

当時在籍していた満洲国からの数名の留学生達は、ご多分にもれず何かと不自由な生活をしていたが、不足も言わず悠々とした風格を備え見事であった。日本の敗色が濃くなると留学生達は帰国できる間に帰国したいと思いはじめたようであった。自分達だけで枚方の役所に行き手続き進めていたが、言葉の関係もあったのかうまくゆかず困惑していたとき、或る同級生がついて行って何とか無事帰国の段取りがつき、間もなく戦場となった母国へ引き上げて行った。その後の消息は知る由もないが級友だった留学生達はどんな人生を送っておられるか、中国残留孤児のニュース等見ると思い出される^③。

戦後になっても、なお留学生のことを思う日本人学生である。こうした激動の時代を超えた友情はそのあと、とくに日中国交回復後、両国民間交流の礎になっていった。一九八〇年代関西医科大学同窓会を通じて、元留学生の母校再訪や、かつての日本人の友達との文通交流は何よりもよい証拠であろう。

六 王静女史の日本留学とその後

筆者は二〇一六年二月十八日に王静女史の自宅でインタビュー調査を行った。その後二〇一六年八月十六日及び二〇一七年二月二十七日に追跡調査も行った。第三回聞き取り調査のとき、傳秀華女史に電話インタビューすることも出来た。そのほか、二〇一七年四月二十七日、関西医科大学牧野キャンパスを訪問した際に、王静女史在学中の同級生であった美濃口知代から、当時の学習環境、逸話などについて証言していただいた。ここに、録音に基づき、主に王静女史の日本留学の状況及び戦後の人生をまとめた。

留学生予備校は一九四三年に第六期生の卒業を迎えた。同年の一月十六日満洲国要員が同行し、大連から船で神戸に七日間でたどり着いた。神戸から京都、そして伊勢神宮へ参拝に行った。その後東京で一旦集合した。東京に約三か月間留まって、

試験を受けた。当時満洲国の女子留学生は留日会館の牛込分館と新宿にある日満帝国婦女会寮³に泊まっていた。寮監は秋山という老婆だと覚えている。この間、新宿の伊勢丹デパートを利用したり、上野動物園に遊びに行ったり、都会の生活を楽しんでいたため、あまり勉強していなかったという。当時第六期生の間、男子学生はみな工学を学び、女子学生はみな医学を志していた。王静女史は満洲医科大学を断念した後、当初東京女医専を志願したが、大阪のほうは競争率が低いため、大阪女医専を選んだ。

一九四三年四月から留学生生活が本格的にスタートした。学校の寄宿舎に入り、六人が泊まれる寝室に一人の留学生対五人の日本人学生といった配分になった。医学、ラテン語、ドイツ語など、授業は日本語で行われ、専門用語はラテン語やドイツ語で提示された。成績評価は点数方式で、合格か不合格かで決まっていたそうである。当時の勉学は如何なるものか、留学生本人ははっきり覚えていない。しかし、美濃口知代女史の話によれば、講堂の後ろにある金木犀の並木通りを歩く満洲国から留学しに來た彼女たちの勤勉な姿は、今でも、はっきりと覚えているという。また、王静女史と傅秀華女史、そしてほかの留学生はみな私費で、生活費は普段仕送りに頼っていた。王静女史は「お金がなければ電報一通でその日に家族から仕送りをも

らえた」という。非常に便利であった。戦時中でもあり、日本人学生と同じく戦時下体制を経験していた。たとえば、千人針に参加した際、一人一針と命じられたが、留学生たちはいたずらでいくつも縫っていた。

学校周辺のラーメン屋でラーメンを楽しんだり、勤労奉公では農作業を体験したり、宝塚で舞台劇を楽しんだり、戦争末期における独特な青春生活を送っていた。傅秀華女史は中国伝統文化や占いについて知っていたため、王静女史から弟子入りの願いがあった。二人は留学生予備校時代から仲がよく、行動は常に一緒であった。たとえば一九四四年旧正月に一度大阪の満洲国留日学生会支部に行ったこともあったという。また休日には、関西での旅行を楽しみ、神戸、京都、奈良に行ったこともあった。凡そ日曜日になると、二人はほかの学校（おもに奈良女子高等師範学校）に通っていた予備校の同期のところに一緒に遊びに行った。その際、事前に連絡を取る必要はなく、その気分になったら、相手の学校に直接に行くことが多かった。京都、奈良であれば、警察署に報告をしなくてもよいが遠いところへ行く場合には、県境を通る際に通行証がいるらしい。どうやら神戸に行くには通行証がいるらしいが、敗戦間際は想像ほど厳しくなかったため、普通に行けたと証言している。神戸で遊んでいた際、米軍の空襲に遭ったが、無事に学校に帰ってき

た。王静女史は夏休みに計二回新京の実家に帰省したことがあるそうだ。一方、傳秀華女史は裕福な家の娘ではないため、在学中帰省したことがなかったという。帰省のルートは神戸から下関に行き、それから船で釜山に渡り、そこから鉄道を通って新京に帰るというものであった。

一九四五年、文部省の法令があり³⁵⁾、また満洲国の民生部（正しいのは文教部）からの要請もあって、時局困難であることを考慮して、留学生をまとめて帰国させていたと証言している³⁶⁾。学業が終わっていなかった学生に対し、満洲国内で相当の学校に通わせる手配をした。やむを得ず帰国するしかなかった王静女史は日本に持ってきたすべての生活用品を当時自宅が全焼した同級生の中田美奈子女史に渡し、朝鮮半島を経由して新京に帰った。

王静女史の場合、政府の斡旋によって、新京医科大学に入学することになった。新京医科大学の先生もみな日本人であり、授業は大阪で学んだことと同じである。八月五日新京に着いたがまもなく日本が敗戦し、満洲国は崩壊した。その後、国民党が東北地域に入り、新京医科大学を長春医科大学に改名した。しかし、名前が変わっても、先生は変わらなかった。新京医科大学で学位を取ってからは、卒業後長春市内の病院で実習を行った。一九四八年長春を立ち、兄と延辺の石岬製紙場（のちの

国営第一製紙場）医務室に勤めた。この兄は新京医科大学の卒業生であり、妻は同級生の梁秀章である。王静女史は日本語ができるので、日本人とも朝鮮人とも仲が良かった。その製紙場は早くも共産党に摂取され、新中国成立前に、国有企業に再編された。新中国の時代、延辺で結婚し、その後一九五三年に設立した瀋陽市工程学院に夫が転職したため、瀋陽に引っ越した。同学院の医務室に勤め、定年退職した。文化大革命の嵐で、兄夫婦をなくしたが、それでも辛抱よく耐えた。文革後、大連外国語学院から日本語教師に勤めないかと誘いが来たが、文革の嵐がいつかまた来るのではないかと恐れたため、断った。二〇一七年現在、瀋陽市内の実家で娘家族と一緒に暮らしている。

傳秀華女史は一九二四年十一月二十五日生まれ。帰国後ハルビン医科大学に学び、その後地元の吉林省蛟河県人民医院副院長に任命され、現地の有名な小児科の先生として尊敬された。文化大革命で迫害を受けていたことから、電話インタビューの際、あまり昔のことについて思い出したくないようであった。退職後、今は息子と一緒に暮らしている。

日本人との交友については、王静女史は文革後、同級生だった中田美奈子女史と二十年間文通を続けていた。傳秀華女史は同級生の徐文書女史と一緒に一九八六年十一月母校を訪問し、

同級生と再会することが出来た。

七 終わりに

昨年発表した論考は新資料より浮かぶ留学生予備校の実態及び王静女史の日本留学以前の学校生活を振り返ってみた。本稿は昨年その続きである。この二つの論説によって、元満洲国留日学生である王静女史の今までの人生を通して、秩序化されていく留学生派遣制度の到達点留学生予備校の経営状況、留学生の日本での生活ぶり、戦争中の緊張状態に際して引き揚げた後の再教育の斡旋といった点から、満洲国の留学政策、さらに戦前大阪女医専のアジア留学生の特徴について判明するところが多かった。以上の論述及び個別事例を通して、大阪女医専におけるアジア留学生のデータを明らかにした。したがって、各地域出身の留学生からこの学校の持つ留学生受け入れの特徴についてまとめると、以下のようになる。

大阪女医専は、創立期より早くも中華民国より「留学生ならぬ留學生」を迎えた。この時期の留學生は親の事情で日本に暮らしていた学生であった。朝鮮半島の留學生はその後日本に残り開業する学生は多かったと言える。日中戦争に突入すると、

中華民国の留學生が見られなくなり、その代わりに満洲国の留學生が著しく増えていたが、戦争末期に際し、ほとんどの學生は學業を完遂することが出来なかった。そのため、卒業生しか把握できない学校側の資料では、彼女たちの名前を見つけることすら出来ない。また、東京女医専に比べると、人数が比較的に少なく、資料は非常に収集しやすかった。このように、一つの学校を通して、戦時中日本におけるアジア留學生、とくに満洲国留學生の生々しい体験を明らかにすることによって、今後戦争末期における近代日本留學生について再考することが出来る。

重ねて論じるが、満洲国政府の留学政策が確立した後、このような医学留学を目的とする女子留學生が多かったことはひとつの特徴である。

さらに今回聞き取り調査及び資料整理において、戦時中とくに戦争末期、日本外務省による留學生素養調査、留學生旅行管理等々、留學生についての管理政策があったと推測できる。今回まだ全貌については詳しく調査できなかった。そのため、今後の課題として、戦前日本政府による留學生管理にかかわる法令など、とくに戦争末期に際し、その変容について論じていきたい。

- (1) 「文部省告示第三百四十号」『官報』大蔵省印刷局一九二八年七月三日。
- (2) 東京女子医学専門学校と帝国女子医学専門学校の二校はそれぞれ明治期と大正期にできた学校で、中国人留学生を受け入れる歴史が比較的長い。具体的な情報は以下の資料に載っている。
『満洲国学生日本留学拾周年史』満洲国大使館内学生会中央事務所、一九四三年。
- (3) 王嵐「満洲国」留学生と山口高等商業学校『教育科学論集』第六号、神戸大学、二〇〇二年、五五—六三頁。
- (4) 周軍「満洲国」留学生と広島高等師範学校『広島東洋史学報』第九号、広島東洋史学研究会、二〇〇四年、七二—八二頁。
周一川「奈良女子高等師範学校における『満洲国』留学生」『人文研究所報』第四五号、神奈川大学人文学研究所、二〇一年、六三—七六頁。
- (5) 以上のように少数ながら、近年このように学校側の資料を発掘し、具体的な学校、学科、個人に焦点を当て、全体を把握しようとする傾向が出てきた。このような研究は今までと違って、全体からは見えない事実を再発見することになり、非常に有意義であると思われる。
- (6) 興亜院『日本留学中華民国人名調』一九四〇年。満洲国大使館『満洲国留日学生名録』一九三五年—一九四三年計九冊。日華学会『中国人留學生名簿』一九三五年—一九四四年（号数によって名前が多少相違あり）
- (7) 内部発行による『留日予備校聚会紀念冊』計八冊及び通信簿が存在している。王静女史の娘の証言によると、一九九〇年退職
- 後の王静女史から単純に、同窓会を作りたいという提案があった。準備段階を経て、ようやく一九九四年に第一回同窓会活動が実行した。詳しい事情については稿を改めて論じることにする。
- (8) 関西医科大学同窓会「おとづれ」関西医科大学同窓会 Web ページ。
(<http://priv.knu.ac.jp/dousou/ototzure/index.html>) 二〇一七年六月二十日参照。
- (9) 興亜院『日本留学中華民国人名調』一九四〇年、七六—八三頁。
- (10) 以下各章人名情報について、以下の二つの名簿を参照。また（仮）と表記する箇所は便宜上つけたものである。卒業できていない留学生は本来卒業すべきだった回数を示す。
- 大阪女子高等医学専門学校同窓会、校友会『第十二回 同窓会会員名簿・校友会会員名簿（昭和二十一年八月現在）』一九四六年。
- 関西医科大学同窓会『二〇一四年版 会員名簿』二〇一四年。
- 関西医科大学同窓会『関西医科大学同窓会五十年史』一九八四年、一八—三頁。
- (11) 蔡聯欽の生涯について、以下の資料を参照し、まとめたものである。田代裕「大阪女子医専第一回生蔡聯欽さん、一翠会と本学の学風形成」『おとづれ』第二二三号、関西医科大学同窓会、二〇〇五年、三—十六頁。栖川武子、西嶋摂子「第一回生蔡聯欽先生を香港に表敬訪問して——卒業生八十年の絆——」『おとづれ』第一三六号、関西医科大学同窓会、二〇一二年、八頁。
- 蔡聯欽「蔡初秋詩詞選」一九七六、自序。

- (11) 田代、前掲論文、六頁。具体的な記事文面を提示したが、実際、朝日新聞の主要紙面に「四異彩」なる記事が見当たらない。
- (12) 伊達俊光『大大阪と文化・長春庵随想録』金尾文淵堂、一九四二年、三七八頁。
- (13) 「18. 大坂女子高等医学専門学校 昭和十二年」
JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B05015501700/ 在本邦選抜留学生補給実施関係雑件/専門学校関係 第二巻 (H5-20-1-8,002) (外務省外交史料館)
このほか父親に対する批判的な言論について、江華本「満洲国建設抗議」が挙げられる。
- JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C1512045400/ 陸軍省パンフレット (19冊) 昭和7年 (防衛省防衛研究所)
- (14) 関西医科大学同窓会『関西医科大学同窓会五十年史』一九八四年、二二一頁。
- (15) Miscellaneous Santa Barbara County, California Obituaries (<http://www.obitcentral.com/obitsearch/obits/ca/ca-santabarabar38.htm>) 二〇一七年六月二十日 参照。
- (16) 関西医科大学同窓会「十六夜会 (十六回生)」『おとくれ』関西医科大学同窓会、第八六号、一九八七年、八十頁。
- (17) 周一川「〔満洲国〕における女性の日本留学——概況分析——」『中国研究月報』第六四卷第九号、一般社団法人中国研究所、二〇一〇年、十八頁。
- (18) 一九四二年に発行された『留学生予備校一覧』に卒業生名簿が載っている。『満洲国留日学生録』に収録されていなかった学校も出てきた。この点については、別稿で論ずる予定がある。
- (19) 留学生予備校同学会『留学生予備校同学録』一九九九年。以下註『同学録』出目を省略する。

- (20) 『教育部特設東北臨時大学補習班同学録』同学会、一九四六年。
- (21) 周一川による史延芳へのインタビュー。周一川 (二〇一〇)、二〇頁。
- (22) 磯谷明全「留日学生会大阪支部に就いて」『満洲国学生日本留学拾周年史』満洲国大使館内学生会中央事務所、一九四三年、一一六頁。
- (23) 程吉子の情報は『満洲国留日学生名録』康德七年版八十頁では出身地を関東州と表記する。また日華学会『第十四版中華民国留日学生名簿』一九四〇年、三四頁では北京と表記する。本来満洲国であったはずだったところ、中華民国の名簿にその名前が見られる。当時傀儡国家満洲国の国籍問題については別の機会に譲る。ひとまずここでは満洲国籍と認め、統計に算入する。
- (24) 李彦春「方軍与謝罪鬼子兵」『北京青年報』二〇〇五年七月四日 Web サイト掲載。筆者翻訳。
(<http://www.china918.net/91805/newxp/ReadNews.asp?NewsID=1142&BigClassName=%BC%CD%4E%E%BB%E%BB6%AF&SmallClassName=%C7%E%CD7%A3%BF%B9%D5%BDC%A4%40%FB%C1F9%CA%AE%D6%DC%C4%E&SpecialID=20>) 二〇一七年六月二十日参照。
- (25) 満洲国大使館『満洲国留日学生名録』一九四一年、一一一頁。
- (26) 満洲国大使館『満洲国留日学生名録』一九四二年、一一六頁。
- (27) 劉振生『近代東北人留学日本史』民族出版社、二〇一五年、二二頁。
- (28) 美濃口知代「中国より同級生」『蘇った四十年 青春の宴』十六回生有志の口述まとめ、一九八六年十一月。
- (29) 二〇一七年二月二十七日王静女史証言内容より。

(30) 同前註。

(31) 劉、前掲書、三一―三二四頁。二〇一七年十月時点ご存命である。

(32) 同註(29)。

(33) 関西医科大学同窓会『関西医科大学同窓会五十年史』一九八四年、二六四―二六五頁。

(34) 『満洲国学生日本留学拾周年史』二一六頁「留学生関係諸機関」

「日満帝国婦人会」によると「事務所は淀橋区西大久保二丁目二百三十六番地日満帝国婦人会館内」と書いてある。学生寮もここであったと推測する。

(35) 田中剛「日本敗戦前後の中国人留日学生政策」『長江流域社会の歴史景観…京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』森時彦編、京都大学人文科学研究所、二〇一三年、二三五―二六三頁。

文部省の戦争末期における指令は一九四四年六月二日に発令した「満洲国留日学生の勤労働員に関する件」がある。すでに一九四四年に帰国準備が着々と進んでいるように見える。一九四五年二月七日に発令した「留日学生非常措置実施要領」の中に詳しく留学生疎開工作について指導が出してきた。田中剛の研究ではこの点について詳しく紹介した。

(36) 満洲国側の資料について、まだ調査が済んでいないところがあり、詳しい事情について判明できていない。しかし、先行研究で言及された留学生の聞き取り調査データに触れていなかった点について、今回聞き取り調査に応じてくれた大阪女医専の元留学生から、文教部の官吏が大阪周辺の留学生を連れて帰国したと証言があった。傅秀華女史の最初の夫はこの官吏であったことが判明したため、これは確かな情報になる。

(り) さい／博士後期課程)